

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 188号

平成29年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

## 新渡戸稲造の講演録より (8)

### 信仰経験を語る (1)

私は、平成15年8月に、当時の勤務先からの出張で札幌に行ったとき、札幌独立教会に立ち寄り、「札幌独立教会100年のあゆみ」上、下巻を買い、そのなかに新渡戸稲造先生が昭和6年5月17日に、札幌独立教会の日曜朝礼拝で話された講演録を発見しました。

新渡戸稲造先生は、この「信仰経験を語る」という講演の中で、札幌時代にキリスト教に入信された経緯、アメリカでクエーカーの信仰にはいられた経緯、晩年の宗教観について述べられています。宮部金吾博士など、札幌時代の旧友も大勢来ていたと思われる聴衆の前で、学生時代の精神の故郷に帰ったなつかしさから、率直な感想を述べられています。原本を喪失いたしましたので、私が、『新渡戸稲造研究』第13号に投稿した論文から、引用いたします。

(新渡戸先生は、札幌農学校2期生として、聖書を学び、内村鑑三、新渡戸稲造らと共に受洗されたのですが、その頃の思い出を、次のように述べておられます。)

今考えるとどれほど読書力があっても神の存在は分からぬ。仮に神が在るように見えても三位一体は分からなく、これについても少なからず書物を読んだがなかなか分からず、哲学書、神学書を読んでも解釈できなかつた。キリスト教の処女降誕、復活等キリスト教

の教義につき、どれとして私の頭に入ったものが無かった。私はキリスト教を信ぜんがためにどれほど頭を悪くしたか知れぬ。

私の迷ったのは神を理解せんとしたからである。また（カーライルの言葉に）「神の存在、霊魂の不滅、これらは汝今後 20 年、2000 年研究しても理解することは不可能なり。ただ信ずるのみ。」と。全く別な力である。信仰は理解とは異なる。カントに言わせると理解が純理であるならば、宗教の如きはむしろ実践力なり。私の様に、本を読み宗教的疑いを説かんとしたのは、数学の問題をうなぎ飯で解こうとするようなもので、宗教の問題を理解せんとするのは不可能であると信ずることができた。

## 信仰経験を語る (2)

初めキリスト教を学問のごとく思い、これに志したのが十有五の時であった。その後前に述べた如く種々雑多の疑いを経て、30にして、キリスト教を棄てるか否か、棄てないと立つに至った。すなわち外国（アメリカ、ドイツ）から札幌へ帰って来たのが29の時であったが、その頃は、信仰が強いのではなく、自分はキリスト信者として立つという決心をしたのであった。

私はいろいろな道に迷って種々な書物を読んだが、ことに教会史を読んだ。洗礼、晚餐等に疑いをいだき、これを理解せんがために教会史を読んだ。その内に非常に気に入ったことは、クエーカーの教会が、洗礼も晚餐もなく、牧師も無く、会堂に信仰を同じくする人が集まり、黙祷を守り、その中に感じでも起こる人は、聖霊により自分はかく思うと証をなすことである。使徒行伝に似ていると思った。またクエーカーは己の心を中心とし、聖書の言葉より各自の本心に重きを置く。…聖書の言葉は神の言葉であるがこれを理解するのは我が心である。心と聖書と一致せざる時は聖書を捨てても自分の心に従うと言うのである。彼らは各自の心を中心とする信者の集まりでペンシルヴァニアに新開地を開いた…。

### 信仰経験を語る (3)

ところがある時 (アメリカのフィラデルフィアに住んでいた時)、偶然クエーカーの教会が減びずにあることを知り、その教会へ行った。やはり牧師はなく、黙祷をしており、そのうち女と言わず、男と言わず聖霊の働きによると前置きして感じを述べた。……再三この教会に出入りし、これだというので入ろうかと考えた。しかしクエーカーの信条箇条中に絶対の平和がある。私も武士のはしぐれに生まれたためか、他の点ではクエーカーに同感であったが、この点については、どうも困って長く入ることができなかった。戦争はこの言うようにそんなに悪いものかと考えた。大体においては非戦論であるが、時によっては戦いをすることが正義なことがある。しかし戦争そのものは悪いと思い、とうとうクエーカーの教会にはいることに決心した。

## 信仰経験を語る (4)

我々は永遠に神に交わると言うも、永遠の者無く、神は永遠である。その神の所に我々が通うと言う事はほんの一瞬かも知れぬが、それでよい。そこに普通に見られぬ安心を得る。聖書に言う常に祈れということは祈りを忘れるなということである。…一瞬間神に交わり、光明に照らされた人は自由の人である。己の欲するところに従い、法を越えない真の自由の身になる。何をしても神に通う者の姿である。我々凡人でも宗教の信念を養い、神の所に通うという経験はただ一度でもよい、そういう人は孔子が70歳で初めてなれた真の自由人となりうるのである。

## 信仰経験を語る (5)

私は自分の経験を少しここで述べた。それは札幌は私にとり精神的誕生地である。ここに初めてキリスト教を知った。聖書をまじめに研究し始めたのもここである。宗教は聖書そのままではなく。外にまだあると考えついたのもここである。信者として弱く、恥ずかしい次第だが、ここで生まれたため、故郷に帰り自分一身の体験を述べ、而してその体験は新渡戸稲造 1 人の体験では無く、おそらく世界凡人の体験、大衆の体験である。また凡人、大衆の体験は成人の体験である。すなわち人間の精神的に進む普通の体験ではないかと思われたため、いささか自分の体験に名を借りて、自分の感ずることを皆様の前にお話しした次第である。

## 新渡戸先生の宗教観 山口の感想（1）

（以下、『新渡戸稲造研究』第13号に、私が投稿した時の論文の最後に付した感想です。）

この二つの講演（「宗教とは何ぞや」（エンカウンター第181号）と「信仰経験を語る」）で述べられている新渡戸先生の宗教観を読んで思うことは、新渡戸先生の信仰が非常に実践的、愛実行的、また祈り重視ということでした。内村鑑三先生の十字架の贖いの信仰とは相当異なっていると言えます。

新渡戸先生がクエーカーにはいられたのは、フィラデルフィア滞在中ペンシルヴァニアにア鉄道の会長のモリス氏というクエーカー信徒のお世話になったこともきっかけであったと思います。モリス夫人の集会の後、新渡戸先生は、やはりクエーカーの名門の出であるミス・メリー・エルキントンと出会ったのです。メリー夫人と結婚されたことが、その後の国際人新渡戸稲造を形作るのに大きな働きをしたと思いますが、クエーカー信者になっていなければ、メリー夫人との結婚はなかったでしょう。新渡戸先生が、クエーカー信者になられたことは、その後の新渡戸先生の行動力、決断力、国際性の基礎になったように思われ、実に重要な信仰上の決断がフィラデ

ルフィア滞在中になされたと言えると思います。このとき、新渡戸先生は、25歳でした。

また、新渡戸先生はご自分の宗教がキリスト教クエーカー派であったわけですが、めったにその事を話したり、書かれたなかったということは、新渡戸先生は、宗教心の重要性はいろいろなところで説かれましたが、どの宗教を選ぶべきかについては、一人一人の選択にまかされたのだと思います。

新渡戸先生の宗教観を一言で表しているのは、先生のお好きだった次の古歌だと思います。

見る人の心ごころにまかせておきて

高根に澄める秋の夜の月



## 新渡戸先生の宗教観（2）

以下は、私の感想であります。たしかに、信仰は、キリスト教であれ、仏教その他の宗教であれ、宗教、宗派の違いを強調するよりは、共通点を見つけて、お互いの信仰を尊重していく方が、よほどお互いの益になるように思います。新渡戸先生が、古歌を借りて、「みる人の心ごころにまかせておきて」と言われるように、それぞれの宗教には、人間の知恵をこえる絶対的実在者の知恵を含んでいるのだと思います。また、無宗教の人は別ですが、一人びとりの長い人生経験に基づいて得られた信仰を、途中から改宗することはほとんど考えられないように思います。

私は、このことを新渡戸先生と南原先生から学びました。